

ハイブリッド文化としてのヨーガ

河 原 和 枝

Yoga as Hybrid Culture

KAWAHARA Kazue

Abstract: Yoga appeared on world's front stage when Swami Vivekananda taught "Raja Yoga" in the United States at the end of the 19th century. In the World Parliament of Religions of 1893, his speech elicited enthusiastic applause. Though an unknown participant from India, he leaped into fame as an excellent religionist of Hinduism. Giving lectures and providing guidance on yoga in various places of the United States, he played an important role in the development of "modern yoga." Such broad acceptance of Vivekananda was based on the fact that cultural interchanges between East and West were progressing in both India and the United States. Yoga in India at that time was also hybridized and because of its hybridity it could be easily globalized. This paper focuses on hybridization of thought and practice of yoga in India during British colonial period and deals with following topics: 1) Translation and research of Hindu sacred texts by the orientalist, 2) Reformation of Hinduism by Indian intellectuals, 3) The independence movement in India and physical culture, 4) Formation of "modern psychosomatic yoga."

Key Words: Yoga, hybrid culture, India during British colonial period

は じ め に

ヨーガは、19世紀末、スワミ・ヴィヴェーカーナンダがアメリカで「ラージャ・ヨーガ」を説いたことによって、世界の表舞台に登場した。1893年、アメリカのシカゴでは、コロンビア万国博覧会が開催された。これに併設された万国宗教大会のなかで、キリスト教や仏教、イスラム教、ヒンドゥー教、儒教などさまざまな宗教、宗派を代表する人びとが一堂に会する万国宗教会議が開かれた。その17日間にわたる会議において、人びとの注目を最も集め、聴衆を魅了したのが、インドから参加した若きヒンドゥー僧、スワミ・ヴィヴェーカーナンダであった。彼は「アメリカの姉妹たち、そして兄弟たちよ」と聴衆に呼びかけ、ヒンドゥー教のヴェーダンタ哲学を、当時の西洋科学や近代哲学を用いて理路整然と鮮やかに説き、「宗教真理の普遍性」と「すべての宗教的自覚の目標の同一であること」を宣言した。彼の普遍的兄弟愛の思想は、欧米の中上流階級の人びとの抱く理想主義的ヒューマ

ニズムの理念に合致し、大会の話題をさらった。彼の言葉は「会議に出席した公式の代表者たちの頭上を越えて、すべての人びとに話しかけられ、世論を震撼した。ヴィヴェーカーナンダの名声はたちまちにして輝きわたった」(ロマン・ロラン)のであった¹⁾。

ヴィヴェーカーナンダは「時の人」となり、請われてアメリカ各地を講演して、そこでヨーガについて語った。ヴェーダの教えである「人間の歩むべき道」を、「ギヤーナ・ヨーガ(ジュニャーナ・ヨーガ、智慧の道)」「カルマ・ヨーガ(実践の道)」「バクティ・ヨーガ(親愛の道)」「ラージャ・ヨーガ(心身統一の道)」として示したのである。このうちの「ラージャ・ヨーガ」が、今日のヨーガに繋がる。つまり、「心身統一の方法」としてのヨーガ、道徳的、肉体的、精神的な「訓練法」としてのヨーガである²⁾。こうした講演に加え、彼はニューヨークにヴェーダンタ協会を設立し、今日なお読まれている『ラージャ・ヨーガ』のほか、『カルマ・ヨーガ』『バクティ・ヨーガ』などの書物を出版した。インドを出たときには無名に近かった彼は、アメリカで一躍、ヒンドゥー教を代表

する宗教的権威、思想的指導者となり、イギリスを経て 1897 年に帰国したときには、母国から偉大な師として、熱狂的に、歓呼して迎えられた。

別稿で述べたように、ヴィヴェーカーナンダは、サンスクリット聖典の『ヨーガ・スートラ』を「ラージャ・ヨーガ」とし、真理に到達するための「心の科学」であると教えた。それらがアメリカで受け入れられた背景には、ともに一部の人びとの間に限られてはいたが、インドとアメリカのそれぞれの側で、すでに東西の思想のハイブリッド化が進んでいたことがある。アメリカでは当時、神智学などのエソテリックな宗教や思想のグループがヨーガに関心をもって研究を進めていたし、ヴィヴェーカーナンダの主張は、彼の師のヨーギ、ラーマクリシュナの教えであるとともに、当時のインドの、西洋的教育を受けた知識人の思想の一端を示すものでもあった³⁾。ヨーガが今日、世界的に普及した理由のひとつは、ヨーガの思想とプラクティスのハイブリディティにある。本稿では、それがどのように進行し、今日のヨーガが形成されていったのかを、イギリス植民地下のインドの事情から見てゆきたい。

1. オリエンタリストによる サンスクリット聖典の翻訳・研究

イギリスのインド進出は 1612 年、まだムガル帝国が繁栄していたころ、東インド会社が最初の商館を西海岸に開設したことに始まる。当初、東インド会社が目指していたのはインドとの貿易、商圏の拡大であり、イギリス、フランス、ポルトガルなどが通商権を争っていた。やがて 17 世紀後半から 18 世紀前半にムガル帝国が衰退すると、各地の太守や土侯たちが勢力を拡大して群雄割拠の様相を呈するようになる。彼らはあい争い、列強の中で生き残って貿易独占権をめぐる抗争していた英・仏いずれかの商人と手を結び、その結果、傀儡化を余儀なくされていく。1757 年のブラッシーの戦いでイギリス軍がフランス軍を破ったとき、イギリスの陰謀に加担したベンガルの新太守も同様の憂き目にあい、ベンガル地方は実質上、イギリス東インド会社の完全な支配下となった。イギリスが商圏拡大から植民地支配へと大きく舵を切ったのは、このときからである。東インド会社は 1857～58 年の「インド大反乱」(「セボイの反乱」)を経て 1858 年に本国の直接統治にいたるまでの 100 年間、徐々に植民地化を進めていった。このプロセスの前半において、

オリエンタリストの時代が到来する。16 世紀にヨーロッパからキリスト教の伝道師がインドに渡って以来、インドは多神教信仰と偶像崇拝の野蛮な慣習をもつ社会と見られてきた。しかし、オリエンタリストたちはサンスクリット聖典を翻訳してインドの思想や文化に共感し、インドの新しい見方を提示した。今日にいたるヨーガを準備したのは、彼らであった。

富澤かなによれば、東インド会社は 18 世紀後半、地租徴収・民事裁判権を獲得して統治活動にあたるようになってもなお、商業活動を本務としていたため、簡便で軋轢の少ない統治を良しとした。それゆえ、既存の文化や制度をできるだけ温存、尊重しようとした。ベンガルの初代総督ウォレン・ヘイスティングスは、とくにインド研究の振興に熱心であり、オリエンタリストのインド研究は、当初からインドの宗教・文化にたいして好意的なベクトルをもっていた。なかでも詩人であり、法律家、百科全書家、古典学者であったサー・ウィリアム・ジョーンズは、インド研究のバイオニアであり、そうしたオリエンタリストの典型であった。ジョーンズは、1768 年にカルカッタ最高法院の判事として赴任し、サンスクリット語を学んでサンスクリット法典を研究した。彼はインドの法体系と文化を知ることには熱意を燃やしたが、その動機には、「成文法ではなく過去の判例の蓄積を基盤とするイギリスのコモン・ローの精神」を実践したいという思いも含まれていた⁴⁾。

ジョーンズは豊穡なサンスクリット語の世界とインドの古代文化を愛し、1784 年にベンガル・アジア協会を設立した。協会の機関紙『アジア研究』は版を重ね、広く評価された。創刊号には古代の碑文の転写や、エレファンタ洞窟の彫刻についての研究が載せられている。彼は近代的な学問の対象としてインドを扱い、インドの法や文学、芸術などについて多くの著作を残し、古代サンスクリット文化のうちにインドの「本質」を見いだした。また、インドに関わる少なからぬキリスト教伝説から、インドと西洋世界の関わりに関心をもってもいた。彼の名を世に知らしめたのは、「印欧語族の仮説」である。この仮説はサンスクリット語とギリシャ語、ラテン語との語彙・文法の類似性から、これらが共通の源をもつ可能性が高いことを指摘したもので、ヨーロッパ中に大きな衝撃を与え、ヨーロッパにサンスクリット語を「発見」させることになった⁵⁾。

ヘイスティングスやジョーンズらの「共感的インド論」の時代は長く続かず、19 世紀初頭にはインドの

社会と文化にきわめて批判的な立場がこれに取って替わり、インドは以後、イギリス本国と同じシステムと価値観によって統治されることになる。ただ、彼らが見いだしたサンスクリット聖典は、以後も重要な役割をはたすことになった。中島岳史は、オリエンタリストがインドの「本質」とみた聖典から、イギリス政府が「公的インド社会観」を構築し、それを現実のインド社会に投影して、さまざまな政策を実行していったと指摘している。その最たる例が徴税と徴兵のための国勢調査で、その結果、ヒンドゥー／非ヒンドゥーの差異が明確化され、それまで流動性をもっていたカースト集団のカテゴリーに基づくヒエラルキー構造が固定化、実体化されることになった⁶⁾。

オリエンタリストたちは、インド統治のための「公的インド社会観」のみならず、「ヒンドゥー教」や「古典ヨーガ（クラシカル・ヨーガ）」といった観念の構築にも大きく関与することになった。従来、インド人は自らの宗教を「ヒンドゥー教」としては、認識してこなかった。山下博司によれば、「ヒンドゥー（Hindu）」という語は、インダス河を意味するサンスクリット語「スインドゥ」がペルシャ語で「ヒンドフ」になり、インドに逆輸入されて「ヒンドゥー」になったもので、西方の人々が「インダス河以東に住んでいた人々」を呼んだ、いわば他称である。同様に、「ヒンドゥー」に「イズム」をつけた「ヒンドゥーイズム（Hinduism）＝ヒンドゥー教」という語彙も観念も、近代に入って外部世界からもたらされたもので、自称ではない。山下は、この宗教の起源をインダス文明（紀元前 2300 年～前 2000 年ころ）や、アーリア人がインド亜大陸に侵入し、ヴェーダ文献が編纂された時期（紀元前 1200～前 500 年ごろ）に見る説もあるという。しかし多くの場合は、「仏教やジャイナ教が興って以降、つまり前 5 世紀ころよりのちに発達し、有力になったものを『ヒンドゥー教』と名づけ、それ以前を『ヴェーダの宗教』とか『バラモン教』と定義する」として、次のように述べている。

ヒンドゥー教は、一人の開祖によって、統一的な教義・体系をともなって形成され発達した宗教ではない。ヴェーダ的・バラモンの価値観や社会制度の枠組みのなかで、民間信仰に発する要素や非アーリア的なものを含むさまざまなレベルの神概念、儀礼、習俗、倫理、社会制度、生活様式などが、一定の纏まりをもちつつ、長い時代を経ながら再編されてできあがった「宗教文化的複合

体」ということができる。ヒンドゥー教はある種の折衷主義を特徴としている。時には互いに矛盾するような考え方や実践をも併呑しつつ統一を保っていられるのは、ヒンドゥー教の折衷主義的な性格によるところが大きい⁷⁾。

また、このようにもいう。

ヒンドゥー教には精緻な哲学思想や洗練された文学理論など、高度に発達した「知」の体系としての上位文化がある一方、生活文化とも言えるような、ふだん意識しないレベルでのヒンドゥー文化もまた存在している。しかし、体系的な「知」の担い手は、一部のインテリや古典文化を伝承するきわめて特殊な階層であることも事実である。実際、大多数のヒンドゥー教徒は、神への崇拝や日常の儀礼を欠かさないとしても、哲学説や哲学理論とはまったく没交渉に暮している⁸⁾。

聖典を拠り所とする高邁なインド哲学は、バラモン階級にのみ伝えられてきた。しかし、18 世紀後半、インドの間ではサンスクリット語や聖典、古典の研究は事実上途絶えており、上流階級のほとんどの人びとはサンスクリット語を読むことも正しく書くこともできなかったのである⁹⁾。イギリスのオリエンタリストたちは、ほんの一部の学識あるバラモンとの共同作業によって、聖典を収集・分類し、翻訳した。そして大衆の宗教からは遊離した古典籍に、キリスト教的、ユニテリアンの観点からインドの宗教を見たのである。その作業においては当然のことながら、これに関わった観念的志向の強いバラモンと、オリエンタリストのイデオロギーが反映される。ジョーンズは聖書の神を信じていたが、イエスの神性を否定するユニテリアンの考えに非常に近く、初期のオリエンタリストたちは同様に、キリスト教の非正統的な信念をもっていた¹⁰⁾。B. マッドセンによれば、彼らの著作にはサンスクリット語の「ブラフマン」がキリスト教の神概念に近いものとして訳されるなど、西洋的理解が投影されているという¹¹⁾。それは冨澤の以下の文章からも推測できる。彼女はジョーンズら初期のオリエンタリストたちの「ヒンドゥー教」観について、こう述べている。

彼らの好意的インド理解は、多くの場合、自文化、特にキリスト教との類似の認識が前提となっ

ている。彼らの多くはインドの宗教は本来唯一神信仰であると主張し、また輪廻説の是非は難しい問題であったものの、魂の不滅、死後の応報の思想も、好意的に解釈された。そしてヒンドゥーイズムには優れた道徳性があり、敬虔さがあると主張していた。つまりこれらが彼らが「良い」と考える宗教の要件であったわけだが、それはすべてキリスト教と矛盾しないものであった。ただし……彼らそれぞれのキリスト教との距離感は微妙なものであり、例えばホルウェルの宗教観はキリスト教の枠組みから大きく逸脱している。ジョーンズも時にキリスト教批判とも受け取れる言葉をもってヒンドゥーイズムを礼賛している¹²⁾。

オリエンタリストたちは、自らの知的ハビトゥスに基づいて種々のサンスクリット聖典を読み、ヨーガにも意味を与えた。ベンガル総督ウォレン・ヘイスティングスは、ヨーガを「発見」し、友人への手紙に「ヒンドゥーの黙想とそれが与える洞察は、キリスト教のそれと同様に価値がある。ヒンドゥーのこうした修練はキリスト教徒に勝るかもしれない。西洋人は最も篤学な人物であっても、感覚の気づきと心を切り離すことには慣れていないのだから」と記した¹³⁾。また、トーマス・コールブルックは 1820 年代初頭、「ヒンドゥー哲学について」という一連のエッセイを発表し、ヨーガを「祈りのエクササイズと精神的抽象化」の体系であると論じ、以後のヨーガ観に影響を与えた¹⁴⁾。ヨーガの観念は、インド社会に根ざす現象というよりは、むしろ文化や歴史を超越した瞑想体系と捉えられたのである。

2. インド人知識階級による宗教改革 ——ネオ・ヒンドゥイズム

19 世紀に入り、ベンガルに新しい都市中間層の知識階級が誕生した。東インド会社のオリエンタリストたちやキリスト教宣教師たちとの関わりによって、西洋の文物や思想がベンガルに流入し、伝統的なベンガルの知識階級が近代化されていったこと、そしてややのちには、何よりもイギリス政府が下級官吏にインド人を採用するために英語教育と西洋的近代教育を行うようになったことが大きな要因である。彼らはオリエンタリストの活動によって誇り得る母国の偉大な過去を知り、英語を通してヨーロッパの合理的な啓蒙思想、自由思想を手に入れた。近代科学とヒューマニズ

ムの理念を内面化し、母国の窮状に自覚的になった。そして 1813 年以降、東インド会社領内での宣教活動が許可されたために、いっそう強化されたキリスト教の布教に対抗しようとした。

そのために、キリスト教に対抗し得る「ヒンドゥー教」が必要となった。インドの文化と宗教の植民地化に対するイデオロギー闘争として、魔術的儀礼や迷信などの無数の大衆信仰にまみれたものではなく、知識人たちの心性に合う合理的な宗教を構築する必要があったのである。彼らは、オリエンタリストによって出版されたサンスクリット古典籍の翻訳や著作に刺激を受け、近代主義的な目で聖典を読み始めた。こうした改革運動の先駆的指導者が、「近代インドの父」と呼ばれるラーム・モーハン・ローイであった。

ラーム・モーハンは、サンスクリット語を学んでウパニシャッド哲学を深く研究したが、西洋近代的な文化がインド社会の復興の助けになると考え、それゆえ政治的にはイギリスの諸制度が母国に導入されるのを熱烈に支持した。当時の知識人は、概ねこうした立場であった。彼は数多くの言語に精通し、イスラム教スーフィズムに親しみ、キリスト教にも造詣が深かった。とくにオリエンタリストたちとの関わりからユニテリアンの教えに共鳴し、彼の影響でバプティスト派の宣教師がユニテリアンに改宗したほどである。が、彼自身は自らの信仰を捨てることはなかった。彼は「墮落し停滞したヒンドゥー教に対する真のヒンドゥー教を知るために、ヴェーダに帰る」ことを主張し、1828 年にブランモ協会を設立し、ヒンドゥー教の宗教改革運動を開始した。そしてウパニシャッドには純粋な一神教が説かれているとして、多神教を排し、偶像崇拜に反対した。また、人道主義的な立場から、寡婦を亡夫の遺体とともに焼く残酷な「サティ」（寡婦殉死）の慣習の廃止に尽力し、ヒンドゥー教保守派との対立を避けたいイギリス政府を説得してこれを違法とさせた。彼が「サティ」廃止の根拠としたのも、それが聖典に認められていないということであった。ラーム・モーハンのいう「真のヒンドゥー教」は「理性、自由、平等、人間愛を強く要求する宗教」であった¹⁵⁾。

ブランモ協会は、折々で傾向は異なり、分派も生じるが、ラーム・モーハンからデーベンドラナート・タゴール、ケーシャブ・チャンドラ・セーンへと受け継がれた。協会はオリエンタリストとの交流の時代が終わって後は、西洋のエソテリズムやスピリチュアリズム、エマーソンのトランセンデンタリズムなどをも

流入させつつ、ベンガルの知識人青年たちを惹きつけていった¹⁶⁾。同様の企てはボンベイでも生まれ、1875年にダヤーナンダ・サラスヴァティによってアーリヤ協会が設立された。ダヤーナンダもまた、「ヴェーダに帰れ」と説き、カースト制や女性差別、偶像崇拜などをヴェーダに説かれていないとして否定した。

こうした知識人たちのプロテスタンティズムの改革運動のなかで、インドの宗教的過去は合理的に解釈され、ヒンドゥー教は、キリスト教よりもはるかに古い、ヴェーダ以来連続する宗教として構築された。イギリス人が侮蔑的に見た大衆信仰は「かつての高貴な宗教の悲しむべき退化」となり、過去への誇りは近代科学と矛盾することなく、むしろ科学がそれを裏づけることになった。これらの改革宗教は「ネオ・ヒンドゥイズム」とも呼ばれる。

この流れの最後に、ヴィヴェーカーナンダが登場するのである。ヴィヴェーカーナンダは1863年にカルカッタの弁護士家庭に生まれ、ミッション・カレッジに学び、西洋的教養を身につけた。ヨーギであるラーマクリシュナに師事する前には、当時の進歩的な青年の常としてブランモ協会に入会し、ケーシャブ・チャンドラ・セーンに強く影響を受けていた。アメリカで、ヒンドゥー教を普遍宗教として提示し、サンスクリット聖典の『ヨーガ・スートラ』に近代ヒンドゥー思想と19世紀西洋の科学や神秘主義の諸観念とを混淆させたものを「ラージャ・ヨーガ」とし、「心の科学」としたヴィヴェーカーナンダの思想背景は、このようにして形作られた。

ヴィヴェーカーナンダはマックス・ミュラーやウィリアム・ジェイムズ、ロマン・ロラン、レフ・トルストイらに大きな影響を与えただけでなく、インドのナショナリストにとっても重要な存在となった¹⁷⁾。彼自身、母国を憂うナショナリストであり、1893年の宗教会議では以下のように述べてもいる。

異教徒の魂を救うために宣教師たちを派遣することがあんなにもお好きなキリスト教徒の皆さん——なぜ、彼らの肉体を飢餓から救おうとお努めにはならないのですか。インドでは、あの恐ろしい飢餓の間に幾千人かが、餓死しました。それでもあなた方キリスト教徒は何もなさらなかったのです。あなた方はインド中に教会をお建てになりますが、捨ておけぬ東洋の不幸は宗教ではありません——彼らは宗教は十分にもっています——焼けつくインドの幾百万の不幸な民衆が、ひからび

たので叫び求めているのはパンです。彼らはパンを欲しがっているのに、われわれは石を与えているのです¹⁸⁾。

3. インド独立運動と身体文化

インド独立運動の指導者、初代首相のジャワーハル・ラール・ネルーは、宗教改革運動について、「新興中間層は政治的意識を強めていたのであって、宗教を探し求めていたわけではなかった。それでも彼らは、拠り所になるなにかしらの文化的ルーツ、自分自身の価値を確認させるなにかを、外国による征服と支配が生んだ挫折感、屈辱感を軽減してくれるなにかを欲していた」と述べている¹⁹⁾。今日に至る宗教ナショナリズムの問題がそこに生じるわけだが、近代思想に目覚めた都市の知識階級はイギリスの植民地支配に疑問を抱き、民族主義的な自覚が大きくなるとなっていた。それは宗教と社会の改革運動となり、政治運動になった。19世紀後半には、カルカッタやボンベイ、マドラスなどの大都市を中心に、政治団体が誕生した。1885年にその動きをイギリス人の元高等文官のA. G. ヒュームが組織化し、インド国民会議が開催された。インドの独立を目指す闘争は、ここに第一歩を踏み出す。

今日のプラクティスとしてのヨーガの系譜を遡ると、この国民会議に参加し、生涯をインド独立に捧げたパール・ガンダール・ティラクを始めとする、独立運動のナショナリストに出会うことになる。ティラクはボンベイ大学を卒業後、学校を創設し、新聞事業に関わり、家族単位で行われていた「ガナパティの祭り」を大規模に組織し民衆運動を盛り上げて愛国心を呼び覚まし、スワデシー運動（イギリス製品をボイコットし、国産品を愛用する）を指導した。「ローカーマニーヤ（人民に敬愛される者）」と称された急進派の闘士である。それとともに彼は、当時、西洋で盛んになっていた「身体文化（physical culture）」の熱心な実践者でもあった。今日のヨーガのルーツの一半は、この身体文化にある。

身体文化とは、たんに身体に関わる文化という意味ではなく、この時期に広く健康的な生活法やフィットネス、運動をさして用いられた言葉で、ボディビルダーとして著名なユージン・サンドウによって広く知られるようになった。世紀末から20世初頭、イギリスでは怪力男（strongman）のショーが盛んに行われていた。サンドウは独自のウエイト・トレーニングのシ

ステムを打ち立て、アメリカやイギリス、さらにインドでもツアーを行って、ボディビルで鍛えた筋肉美や怪力を披露する興行や講演を行った。1898 年に『サンドウの身体文化』という雑誌を創刊し、またトレーニング教則本を執筆して多くの読者を獲得し、絶大な人気を得た。彼の教則本は日本でも翻訳され、『サングウ体力養成法』として明治 33 年 (1900 年) に刊行されている²⁰⁾。

身体文化が流行した背景には、19 世紀を通じて西洋で身体への関心が高まっていたことがある。イギリスでは 1830 年代からパブリックスクールでスポーツが行われるようになり、「筋肉的キリスト教 (Muscular Christianity)」と呼ばれる、キリスト教精神と健康と強さ、男らしさを結びつける動きが広がっていた。1844 年に設立された YMCA も、1891 年に「心・知・体 (spirit, mind, body)」の有名な逆三角形のロゴを用いるようになった。1896 年には、最初の近代オリンピック、アテネ大会も開催されている。また、ギリシャ彫刻のように筋肉隆々たる肉体を誇るサンドウの人気は、産業化、都市化の進展とともに、西洋人が肉体や精神の活力の低下を感じるようになったこととも関わっている。

さらにインドでは、イギリス人によって作られた脆弱神話——インド人とインド社会は肉体的、道徳的、精神的に墮落している——が植民地支配を正当化する要因ともなり、インド人自身もその神話を内面化していた。それゆえ、筋肉は労働者階級のものとして蔑まれる傾向があったにもかかわらず、インド各地のエリート知識人たちは、墮落とされる状態を克服するために、身体文化に関心を寄せたのである。ヴィヴェーカーナンダもまた、帰国後、「筋肉的ヒンドゥー教」ともいえる立場をとり、B. G. ティラクや、独立運動に奔走した後、ヨーギとなり、今も崇敬される思想家のオーロビンド・ゴシュラに影響を与えた。ヴィヴェーカーナンダは、「インド人には鉄の筋肉と鉄の心が欠けている²¹⁾」といい、次のように述べている。

もしもこの世に罪があるとすれば、それは弱さである。すべての弱さを避けよ、弱さこそ罪である。弱さは死である……真実の試金石とはこれだ。あなたを肉体的に、知的に、そして精神的に弱めるものをすべて毒として拒否せよ、その中に命はない。それは真実ではありえない²²⁾。

ヴィヴェーカーナンダは身体文化を支持したもの

の、ハタ・ヨーガのプラクティスについては「実践はたいそうむずかしくて 1 日で学ぶことはできず、そして結局、霊性の成長とはほとんど無関係であるため、私たちのヨーガとは何の関係もない」として忌避した²³⁾。しかし、インドの身体文化の実践者たちは、土着の身体の鍛練法であるヨーガをそこに取り入れていった。ティラクは身体文化を自ら実践しただけでなく、代表的な身体文化の活動家、K・ラマムルティ教授を支援した。ラマムルティは、インドやヨーロッパで、ヨーガによって得たという怪力を披露して知られた。1911 年のロンドンでのパフォーマンスでは、首で鎖を引きちぎり、3 トンの象や自動車のほか、60 人を載せた荷車に体の上を通過させたという。インドに來たサンドウに挑戦して惜しくも敗れたが、彼や、世界チャンピオンになったレスラーが、自由への闘争の英雄的シンボルになったのである。ラマムルティは、インドのヨーガとイギリスの身体文化などを混合したものをすべてインド由来と主張し、「インドの身体文化の方法」がもっとも効果的であると述べ、インドのヨーガ的身体文化のパイオニアとなった²⁴⁾。

また、現代のほとんどのヨーガスタジオで行われている「太陽礼拝 (スーリヤナマスカーラ)」のシークエンスを広めたのは、アウンズの藩王、プラティニディ・パントであるとされる。彼もサンドウの信奉者であり、熱心なボディビルダーであった。「太陽礼拝」は 17 世紀のインドで行われていたようで、彼の発明ではないが、彼はそれをヨーガとは見ておらず、自著で身体文化の枠組みのなかに位置づけている。プラティニディ・パントもティラクと直接的な関わりがあり、身体文化によるインド人の身体改善を、当時、流行の優生学的観点から論じている²⁵⁾。

もちろん、強健な身体を作ることは、個人と社会を改良する手段であるとともに、武力闘争の切迫した必要性に応じるものでもあった。インドの独立は、マハトマ・ガンディーの指導で展開された非暴力運動によって、1947 年についに達成された。しかし、そこに至るまでには、独立に向けて、武力闘争もさまざまに展開されていた。インドには、ヨーガで鍛えた戦闘的サンニヤーシン (托鉢修行僧) の長い歴史があり、ハタ・ヨーガと武術訓練とは結びついていた。さらに 1884 年に書かれたバンキム・チャンドラの愛国小説『アノンドの僧院』には、外国の勢力と戦う愛国的ヒンドゥーのサンニヤーシンの理想の姿が描かれ、1908 年の V.D. サヴァルカールのノンフィクション『1857 年インド独立戦争 (セポイの乱)』は武力闘争の手引

きともなり、「闘うヨーギ」のイメージはさらに広まった。20世紀初頭には愛国的な身体文化のジム（アクハラ）が生まれ、それが政治闘争の中心的役割を果たすこともあれば、ヨーガの練習が戦闘訓練の隠れ蓑となることもあった。

たとえば、愛国的身体文化を推進したラジャラトナ・マニック・ラオ教授は、レスラー、体操選手、武術家であったが、革命の闘士でもあった。彼はインド独立のために暴力革命が必要であるとして、強い身体をもつ兵士の育成を説いた。そして闘争に展開できる戦闘的な武術教育を教えるとともに、若者たちの育成のために西洋の体育やインドの土着的な身体訓練法を積極的に採用し、集団教練（mass drill）を唱導した。彼に師事したシュリ・ラガヴェンドラ・ラオ（ティルカ）²⁶⁾は、やがて1930年代初頭に、たんなるヨーガのグルを装って逮捕を免れながら、各地を巡り、表面上はヨーガのアーサナや太陽礼拝、プラーナーヤマなどを教えつつ、人びとの身体を鍛え、格闘技法を教えた。彼がヨーガの名のもとに教えたのは、師のマニック・ラオが集めた、東西の種々の身体トレーニング法であった。このようにして何千もの自由の闘士たちがヨーガを通して組織化されたという²⁷⁾。

身体文化の実践者たちは身体文化と鍛練法としてのヨーガを融合し、それを身体文化と見ることもあれば、ヨーガとして捉えることもあった。20世紀前半のインドで最も有名な身体文化の唱道者であったK. V. アイヤー（1897～1980）は、世界的な身体文化雑誌『健康と力』や『スーパーマン』にギリシャ彫刻のようなポーズで登場したボディビルダーであった。彼はボディビルとヨーガを組み合わせて自らの素晴らしい身体を作り上げたとして、彼のジムや通信教育で、その両方を教えた。また彼の弟子のヨガカルヤ・サンダラムは、『ヨーガの身体文化、または幸福の秘訣』（1928年）を刊行したが、それは体操や健康法、ボディビルとはいうものの、写真入りのハタ・ヨーガの独習本であった²⁸⁾。

そして一方で、身体文化をバックグラウンドとしつつ、そのプラクティスをヨーガとして新たに再生する動きが、ヨーガのルネサンスと呼ばれるものになった。

4. 近代的心身ヨーガの誕生

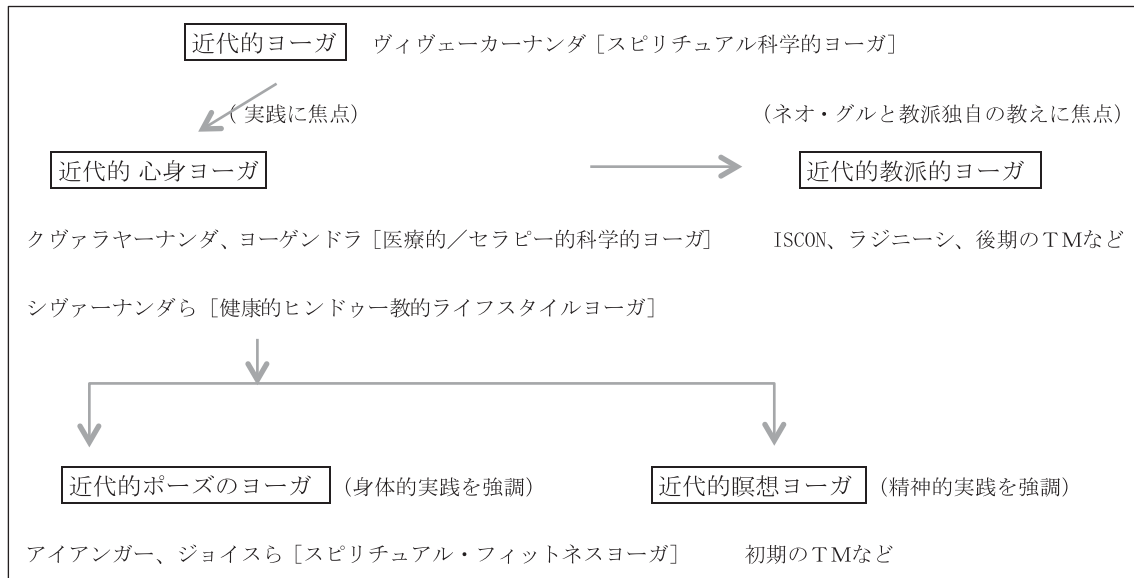
エリザベス・ド・ミシェリスは、ヴィヴェーカーナンダに始まった近代的ヨーガ（modern yoga）が、プ

ラクティスに焦点を当てた「近代的心身ヨーガ」（modern psychosomatic yoga）に発展し、そこから身体訓練を強調する近代的ポーズのヨーガ（modern postural yoga）と、精神的涵養を重視する近代的瞑想ヨーガ（modern meditational yoga）が派生したという。マッドセンはヴィヴェーカーナンダのヨーガをスピリチュアル科学的ヨーガ（spiritual scientific yoga）と呼び、プラクティスのヨーガをその性格から、医療的／セラピー的科学的ヨーガ（medical/therapeutic scientific yoga）、健康的ヒンドゥー教的ライフスタイルヨーガ（healthy Hindu lifestyle yoga）、スピリチュアル・フィットネスヨーガ（spiritual fitness yoga）の3つに区分している。ミシェリスはまた、1960年代に登場した、近代的ヨーガの教えの要素を組み込んだ、よりイデオロギー的なグルや集団を近代的教派的ヨーガ（modern denominational yoga）と位置づけている。この流れをミシェリスが図示したもの²⁹⁾にマッドセンの区分を加え、簡単にすると次頁のようになる。

1920年代、30年代は、この近代的心身ヨーガ、つまり今日に続くプラクティスのヨーガが創造された時代である。ヒンドゥー・ナショナリズムの高まりとともに「あるべき」ヒンドゥー教が構築され、ヴィヴェーカーナンダによってヨーガが「心の科学」として提示されたように、今度は、ヒンドゥーの身体実践としてのヨーガが見直され、再発明されることになった。

インドでは、YMCAが1919年に最初の体育教師養成学校を設立して以来、体育教育が非常に活発になっていた。当時、教育現場で人気のあったトレーニング法は、第一にリングのスウェーデン体操、次いでニルス・ブックのデンマーク体操であった。だが、そこでも西洋式だけでなく土着の方法が求められるなど、インド固有のエクササイズへの関心が大きくなっていった³⁰⁾。こうした流れのなかで、大道芸人や乞食然とした現実のハタ・ヨギンの多様な実践は捨ておかれ、「あるべき」ヨーガの身体実践が求められた。それはハタ・ヨーガから採られた。

アーサナ（座法）は、『ヨーガ・スートラ』（4～6世紀）の中でヨーガの8部門のひとつに位置づけられているが、これは瞑想のための、文字通りの座法をいい、体操のようなものではない。ポーズをとるアーサナは、中世になり、ハタ・ヨーガの発達とともに登場した。現存するハタ・ヨーガの教典には『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』（16～17世紀）『ゲーランダ・サンヒター』（17世紀?）『シヴァ・サンヒター』（17～18世紀?）がある。これらも19世紀末から



1930年代にかけてサンスクリット語から英訳された。この3書の佐保田鶴治訳の構成を見ると、『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』はアーサナ／調気法／ムドラー／ラージャ・ヨーガ、『ゲーランダ・サンヒター』では、浄化法／アーサナ／ムドラー／制感法／調気法／ディヤーナ・ヨーガ／サマーディ・ヨーガ、『シヴァ・サンヒター』では宇宙観／人間論／ヨーガの修習／ムドラー／雑録、の諸項目から成っている。アーサナは体位法や体操、調気法（プラーマヤーナ）は調息法や呼吸法とも訳され、3書ともに項目をもつムドラーとは、クンドリニーを覚醒させる多様な方法をいう。佐保田によれば、アーサナやムドラーなどのハタ・ヨーガの行法の根本目的は、クンドリニーを覚醒させることである。クンドリニーとは「宇宙を創造し、そして動かしている力（シャクティ）が、小宇宙である人体のうちにひそんでいる姿をいうので、ものすごい力を秘めた、潜勢的なエネルギー」であり、「人体の内部の生命の樹である背骨の最下部に3まわり半のとぐろを巻いて眠っている蛇」だとされる。この蛇を目覚めさせると、「脊柱の中央を貫くスシュムナーという不可視の細管のなかを上昇して、終には頭頂に達する。その時スシュムナー管の6カ所にあるチャクラ（センター）を開くから、人間の本来もっているいろいろな能力や性質が、次第に低級なものから高級なものへかけて開発される」という³¹⁾。それには「病と死と老衰を免れる³²⁾」「過現未三世を対象とする無限の智を得る。遠聴と遠視の力を得、またのぞみのままに空中を歩くことができる³³⁾」などの超能力も含まれる。もちろん、歴史的にインドのヨーギたちが、実際どれほど教典に依拠していたかというのは、また別の

問題であるが、ハタ・ヨーガに魔術的な要素が強かったことは確かである。

しかし、そこに近代的アプローチがなされた。オルターは、身体文化のアイヤーとほぼ同時期に活躍した、スワミ・クヴァラヤナンダ（1883～1966）とシュリ・ヨーゲンドラ（1897～1989）をヨーガ・ルネサンスの重要人物として挙げている。そして近代的なハタ・ヨーガに、より大きな影響を与えたのは、ヴィヴェーカーナンダやオーロビンド・ゴーシュといった思想家よりむしろ、ボディビルダーのユージン・サンドウであったと示唆する。クヴァラヤナンダはマニック・ラオに体操や運動生理学を学んでその影響を強く受けていたし、ヨーゲンドラはヨーガに出会う前の若き日、レスラーであり、エクササイズマニアでもあった³⁴⁾。

スワミ・クヴァラヤナンダは、大学を卒業後、ティラクやオーロビンド・ゴーシュに影響を受けて政治運動に関わった後、教育に従事し、大学の学長も務めたが、ヨーギのマードヴァダースジーに出会ってヨーガの指導者となった。ただ、彼は下帯のヨーギではなく白衣の研究者となり、1924年にローナヴァラにカイヴァルヤダーマ・ヨーガ研究所とアシュラム（道場）を開設した。また、教育者として1927年から37年にかけてボンベイ政府の体育委員会に関わって集団練習のヨーガ的体育を考案し、体育関係の審議会の委員長などを歴任した。彼の身体文化プログラムは、全国の教育現場に広まっていった。それは、ヒンドゥー的国民性を作り出すための規律訓練の方法であった。こうした気運の高まりは学校教育以外にも見られ、1925年には、ティラクの支持者であったヘードゲー

ワールが、ヒンドゥー・ナショナリストの団体として今日まで続く、RSS（民族奉仕団）を組織している。彼もまた、ヒンドゥーの団結は個々人の身体的・知的訓練を通じて強化されると考え、広場や公園などで小規模な単位で日々の訓練を行う「シャーカー活動」を重視した³⁵⁾。

ローナヴァラのアシュラムで、実際、どのようなヨーガの身体実践がなされたのか。研究所創設から30年近く後のことになるが、沖正弘がこのアシュラムでヨーガを学んだ体験を記している。沖はインドで行われていたユネスコの平和建設国際奉仕団の仕事を終えたあと、スイス人の同僚に「^(ママ)ノナワラのヨガ研究所は、きっときみを満足させるはずだ。……ヨガをいちいち科学的に解説している。去年の夏、ぼくが訪問したときには、ドイツの生理学者やアメリカの医者も来ていたよ。そのほか、民間の欧米人研究者が20名ばかりいた。ヨーロッパやアメリカでのヨガに対する関心の強さを知ったら、きみだってびっくりするだろう」と誘われ、1952年に半信半疑でこの「世界最大のヨガ研究所」を訪れた。そして結局、ヨーガのさまざまな行法や断食などを学ぶことになり、アシュラムに1年半、滞在し、クヴァラヤーナンダにも会っている。そこでは、水浴、瞑想、体の浄化法、体操と呼吸法の合同訓練、自由独習、哲学講義などが日課として行われた。彼は胃や腸や耳や鼻の浄化法（ヨーガのダウティ、バステイ、ナウリ、ネーティなど）を「人間の体を、まるで自動車の掃除でもするような調子で、洗ったり油をさしたりするのだ。それは、直接体内の汚物を取り除くほか、指圧やマッサージで血行をよくし、血液を浄化することも含んでいる」と述べ、またヨーガのアーサナとして今日も行われているポーズを、さかだち、逆さかだち（肩立ちのポーズ）、弓のポーズ、魚のポーズ、バッタのポーズ、ねじるポーズ、アーチのポーズ、鋤のポーズなどとして、その方法や治療的効能を述べている。また「あとでわかったことだが、呼吸法こそ、ヨガのあらゆる行法の基礎であり、真髄であったのだ。体操や瞑想や、さらには、自分の意思で肉体の生理現象を自由に操ることも、すべてこの呼吸法なしにはできないのである」と記している³⁶⁾。

沖のローナヴァラでの経験は1952年のことだが、クヴァラヤーナンダがヨーガの身体実践として提示したものは、当初からさして変わるものではなかったであろうと思われる。クヴァラヤーナンダと同じく、ヨーギのマードヴァダースジーの弟子であったシュリ・

ヨーゲンドラは、クヴァラヤーナンダに先立ち1919年にボンベイの郊外、サンタクルスにヨーガ研究所を建て、ヨーガの指導と研究を開始した。翌1920年にはアメリカに渡ってニューヨーク近郊にヨーガ研究所を設立し、4年間、ヨーガの科学的実証と治療を兼ねて多くの医学専門家とともに臨床実験を行った。従来の秘教的なハタ・ヨーガのイメージを覆し、帰国後もインドとアメリカを中心に、一般の人びとが行いやすい健康とフィットネスのためのヨーガの普及に努め、多くの書物を出版した。この研究所にも、日本人が訪れている。山崎正は、1973年、心身症とヨーガ療法の研究のためにボンベイの研究所に滞在し、ヨーゲンドラのもとで2カ月あまりヨーガを学んだ。そして後に、ヨーゲンドラが1931年に刊行して以来、版を重ねてきた『かんたんなヨーガ健康法 Yoga Hygiene Simplified』と『かんたんハタ・ヨーガ Hatha Yoga Simplified』を合本し、邦訳して『ヨーガ健康法』として出版した。本書には、ハタ・ヨーガの身体観が当時の科学的知識によって説明されており、また「鼻の保健」「消化器の保健」「腸の保健」「呼吸器官の保健」などの項目に合わせ、呼吸法、洗浄法（浄化法）やさまざまなアーサナが、より具体的に詳しく、どのように健康に役立つかが述べられている³⁷⁾。それは沖が経験した浄化法やアーサナとほぼ同じように見える。ヨーゲンドラは、123歳で没した師の最晩年時に起居を共にして秘法を授けられたとし、師資相承の重要性を強調して「クヴァラヤーナンダその他の自称ヨギ」³⁸⁾と、ライヴァルを非難している。しかしシングルトンによれば、ヨーゲンドラのアーサナにもまた、身体文化のエクササイズとレトリックが染み込んでおり、西洋的な健康体操と変わるものではなかったという³⁹⁾。

さらに、両ヨーガ研究所では、ともにヨーガに対する科学研究が行われた。クヴァラヤーナンダは、ハタ・ヨーガの神秘的、密教的な解釈が、真理を明らかにするよりも難解にしていると考え、科学によって脱神秘化することで、ヨーガに示される普遍的な真実を明らかにしたいと望んだ。それはとくにヨーガの身体についての生理学的研究に顕著で、研究には当時最新の顕微鏡やX線装置、血圧計などが用いられた。彼が最初に行った実験は、さまざまなアーサナやブラーナヤーマの最中とその後の、血圧、食道内圧、心拍数を計測し、その変化を見るものであった。そこに自然の法則を見いだそうとしたのである。研究は生物化学に加え、心理学、哲学、教育学などにもわたり、その成果は機関誌『ヨーガ・ミーマンサー』に発表さ

れた。この機関誌はスピリチュアリティと科学との結合に焦点を当て、「科学的」「準科学的」「大衆的」の3項目に分けて専門家にも一般人にもアピールするよう考案されており、実際、インドのみならず、欧米の心理学や生理学の専門家たちからも高く評価された⁴⁰⁾。

ただ、ヨーガは本来、形而上学的な存在論に基づいており、科学の認識論と合致するものではない。オルターによれば、カイヴァルヤダーマで行われた実験は、「プラーナ」（気、息、生命エネルギー）や「チャクラ」（エネルギーのセンター）、「微細体」（ヴェーダンタ哲学では人間の魂は「粗雑体（＝肉体）」「微細体」「原因体」の3層に覆われているとされる⁴¹⁾）などというヨーガ生理学の形而上学的概念を、現実の肉体に位置づけ、測定しようとしたものだった。それゆえ実験は、それによって自然の法則よりはむしろ超越的な法則を確立するという逆説的效果をもたらした。両者の明らかな存在論的パラドクスは、一種のメビウスの輪を作り出し、科学とヨーガは互いの主体となり客体となる。ヨーガが科学に従属すればするほど、科学がプラーナの性質を発見すればするほど、ヨーガは真理を求める手段として強力となる。オルターは、クヴァラヤーナンダの研究は、ヨーガが、それ自体のなかで、そして身体化されたプラクティスのなかで、物理科学と形而上学的経験との2つの焦点を含む楕円であることを可能にしたと述べている⁴²⁾。

オルターの指摘は今日のグローバル化されたヨーガの理論的困難を示すのみならず、その隆盛を説明し得る要因としても興味深い。だがそれは改めて検討するとして、ともかく、クヴァラヤーナンダやヨーゲンドラ⁴³⁾によってプラクティスのヨーガもまた、近代科学の言語で語られることになった。それによってヨーガはインドの文化の重みから離れ、セラピーとして、また代替医療としての近代的な心身ヨーガとなり、インド亜大陸を離陸することになった。マッドセンは彼らのヨーガを「医療的／セラピー的科学的ヨーガ」と呼んでいる。

一方、クヴァラヤーナンダと同世代のスワミ・シヴァーナンダ（1887-1963）は、自身が西洋医学の教育を受けた医師であったが、よりスピリチュアルなヨーガにと向かった。彼はマレーシアで医療活動を行った後、インドに帰って出家し、1924年にヒマラヤ山麓のリシケーシュでサンニヤーシンとなった。厳しい修行を積む傍らで施薬などの医療奉仕を行い、彼を慕って弟子が集まった。やがて1936年には彼のアシュラ

ムを拠点としてデヴァイン・ライフ・ソサエティを、1948年にはヨーガ・ヴェーダンタ・フォレスト・アカデミーを設立して積極的に布教活動を行うようになった。彼はヒンドゥー教を世界の救済宗教として広めようとしたことにおいて、ヴィヴェーカーナンダの継承者であった。1953年にはリシケーシュのアシュラムで世界宗教会議を開催し、世界のすべての宗教はひとつであると説いてもいる。そしてヨーガに関わる300冊を超える書物を出版し、世界に向けて発信するとともに、数多くの弟子を育て、海外に伝導に向かわせた。彼のヨーガは、アーサナとプラーナヤーマ（調息法）とクリヤー（一種の浄化法）の鍛練を続けることを通じて、心身ともに壮健になることを目指すものである⁴⁴⁾。マッドセンは「ネオ・ヴェーダンティックなヒンドゥーの生き方を奨励する」ことからそれを「健康的ヒンドゥー教的ライフスタイルヨーガ」と呼んでいる⁴⁵⁾。

シヴァーナンダの跡を継いだスワミ・チダーナンダやスワミ・サッチダーナンダら優れた弟子に恵まれ、彼のアシュラムは今も世界的な名声を放っている。リシケーシュは今日、このアシュラムを筆頭に数々のアシュラムやヨーガスクールが立ち並び、ヨーガの聖地として日本を始め世界のヨーガのインストラクターやファンを集めている。また、シヴァーナンダの弟子のヴィシュヌ・デーヴァーナンダはアメリカを中心に積極的に布教活動を行い、国際シヴァーナンダ・ヨーガ・ヴェーダンタ・センターを設立し、平和運動に取り組むなど華々しく活躍した。彼は西洋人の生活やニーズに合わせ、「ヨーガの古くからの知恵」を「正しいリラクゼーション」「正しい運動」「正しい呼吸」「正しい食事」「前向きな思考と瞑想」の5原則にまとめた。「正しい運動」とは太陽礼拝や、上述の肩立ちのポーズや鋤のポーズ、魚のポーズ等々を深い呼吸と共に行うことである⁴⁶⁾。

さらに次世代のプラクティスのヨーガの流れを、ミシェリスは「近代的ポーズのヨーガ」、マッドセンは「スピリチュアル・フィットネスヨーガ」と名づけている。この呼称についてはマッドセンの方がより明解であろう。医療的、セラピー的ヨーガ、健康的ヒンドゥー教的ライフスタイルヨーガも同様にアーサナ（ポーズ）を重視し、それらのプラクティスと比べ、このグループはよりフィットネスの要素が強いからである。それはクリシュナマチャルヤ（1888～1989）に始まり、彼の弟子のB.K.S.アイアンガー（1918～2014）のアイアンガー・ヨーガ、パッタビ・ジョイス（1915

～2009) のアシタンガ・ヨーガにと続き、また、アシタンガ・ヨーガから派生し、アメリカで生まれて世界的なヨーガブームの起爆剤となったベリル・ベンダー・バーチらのパワー・ヨーガや、現在流行中のビクラム・チョドリーのビクラム・ヨーガ(ホット・ヨーガ)までもが含まれる。つまり、アメリカを中心にフィットネス文化と結びついたヨーガである。

クリシュナマチャルヤは、ヴェーダンタ哲学に精通し、チベットに師を求めてヨーガの修行を行うなどして後、1933年からマイソールのマハラジャのもとで王族の子弟にヨーガを教えた。しかし彼の名が今に知られるのは、彼の方法論を学んだアイアンガーやパッタビ・ジョイスらの世界的活躍によるところが大きい。クリシュナマチャルヤのアーサナのシステムについて、シングルトンは、デンマーク人のニルス・ブックの基本体操との類似を指摘し、彼が、欧米の体操教育とヨーガを融合させたクヴァラヤーナンダの「ヨーガ的体育」を視察していることから、これを取り入れたものであろうと推測している。また、ボディビルダーのあいだで行われてきた太陽礼拝を、クリシュナマチャルヤが当時のヨーガの傾向に合わせてアーサナのシークエンスにつけ加えたのだらうとも述べ、身体文化の振興に熱心であったマイソールのマハラジャやK.V.アイヤーらとの関わりや、当時のクリシュナマチャルヤの置かれていた立場などについて、ていねいに跡づけている⁴⁷⁾。今日、数えきれないほどのヨーガの流派が誕生しているが、太陽礼拝とさまざまなアーサナとを組み合わせた今日のヨーガのシステムは、このようにして形成されたということができる。

注

- 1) スワミー・テジャサーナンダ『調和の予言者 スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と教え』日本ヴェーダンタ協会、2013年、63-73頁。杉本良男「比較による真理の追求——マックス・ミュラーとマダム・ブラヴァツキー」出口顕・三尾稔編『人類学的比較再考』国立民族学博物館調査報告 90、2010年、179頁。ロマン・ロラン『ロマン・ロラン全集 15 伝記 ラーマクリシュナの生涯 ヴィヴェーカーナンダの生涯と普遍的福音』宮本正晴訳、みすず書房、1980年、204頁。河原和枝「ヨガ——文化のグローバリゼーションをめぐる」甲南女子大学紀要第51号人間科学編、2015年3月、92-93頁。
- 2) 玉城康四郎『近代インド思想の形成』東京大学出版会、1965年、216-222頁、268-269頁。スワミー・テジャサーナンダ、前掲書、74頁。ヴィヴェーカーナンダは「ジュニャーナ・ヨーガ」に最も価値を置いたが、アメリカで人気を博したのは、方法論たる「ラージャ・ヨーガ」であった。
- 3) 河原、前掲論文、89-97頁。
- 4) 富澤かな『『オリエンタリスト』のインド観に見る宗教と宗教史への視座』市村裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か』下巻、リトン、2009年、346頁。なお、富澤は、本論文において、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのイギリスで、インドの文化の尊重・維持に基づく統治を求めた東洋文化・言語尊重派の人びとを「オリエンタリスト」、インド文化を否定しそのイギリス化を求めた人びとを「アングリシスト」と、オリエンタリストの語を限定的に用いているが、本稿ではその意味での「オリエンタリスト」を含め、広くサイド流に「オリエントの特殊な、または一般的な側面について、教授したり、執筆したり、研究したりする人物」をオリエンタリストとする。
- 5) 富澤、同書、328-329頁、346頁。富澤によれば、オリエンタリストのインド研究のベースには、比較と共感があり、そこに聖書的世界観が微妙に関わっていた。インドは「東方の楽園の伝承、聖トマススの布教伝説、プレステビル・ヨハネス(プレスター・ジョン)伝承、ヨーロッパと同じくノアの末子ヤベテの子孫とみなされる傾向などにより、キリスト教文化世界」(330頁)である、というイメージが西洋に長く潜在していた。
- 6) 中島岳史『ナショナリズムと宗教』文春学芸ライブラリー、2014、82頁。
- 7) 山下博司『ヒンドゥー教——インドという謎』講談社選書メチエ、2004年、27-28頁。
- 8) 同書、243頁。
- 9) 竹内啓二『近代インド思想の源流——ラムモハン・ライの宗教・社会改革』新評論、1991年、30頁。
- 10) De Michelis, Elizabeth. 2004. *A History of Modern Yoga*, Continuum, p 44.
- 11) Madsen, Borge, 2013, *Why Yoga?: A Cultural History of Yoga*, MadZen Press, p 115.
- 12) 富澤、前掲書、341頁。
- 13) De Michelis, *op.cit.*, p 44.
- 14) Madsen, *op.cit.*, p 42.
- 15) 竹内、前掲書、36-83頁、105-106頁、192-193頁。
- 16) De Michelis, *op.cit.*, pp.45-90.
- 17) インド人として最初で最後のインド総督ラジャール・ゴーパーラチャリは、ヴィヴェーカーナンダがヒンドゥー教を救ったといい、スバス・チャンドラ・ボースは彼を「近代インドの創造者」と呼んだ。マハトマ・ガンディーは、彼の影響で母国への愛が何千倍にもなったと述べてもいる(杉本、前掲書、195頁)。
- 18) スワミ・ヴィヴェーカーナンダ『シカゴ講演集』1995年、日本ヴェーダンタ協会、50頁。
- 19) ビバン・チャンドラ『近代インドの歴史』栗屋敏江訳、山川出版社、2001年、233頁。
- 20) 岡田桂「柔術家シャーロック・ホームズ、柔道家セオドア・ルーズベルト——英米における柔術／柔道ブームの位相と身体文化」坂上康博編著『海を渡った柔術と柔道』青弓社、2010年、80-82頁。窪田登『筋力ト

- レーニング法 100 年史』体育とスポーツ出版社, 2007 年, 29-44 頁。
- 21) 森本達雄『インド独立史』中公新書, 1972 年, 68 頁。
- 22) ビパン・チャンドラ, 前掲書, 246 頁。
- 23) ヴィヴェーカーナンダ『ラージャ・ヨーガ』日本ヴェーダ学会, 1977 年, 32 頁。ヴィヴェーカーナンダは師のラマクリシュナの死後, ハタ・ヨーガで身体を鍛えようと考え, 当時有名なヨーギについて学ぼうとしたが, 繰り返し, 師のヴィジョンを見て断念したという。Singleton, Mark. 2010, *Yoga Body: The Origins of Modern Posture Practice*, Oxford University Press, pp.72-73. (喜多千草訳『ヨガ・ボディーポーズ練習の起源』大隅書店, 2014 年, 89 頁, 92-93 頁)
- 24) *Ibid.*, pp.95-97, pp.107-108. (訳書 123-126 頁, 139-141 頁)
- 25) Singleton, Mark, 2016, *Yoga and physical culture: transnational history and blurred discursive contexts*, Knut A Jacobson (ed.) *Routledge Handbook of Contemporary India*, Routledge.
- 26) ラガヴェンドラ・ラオ (ティルカ) は, リシケーシュのシヴァナンダ, アウンドのプラティニディ・パント, ヨガナンダ・パラマハンサらにも師事し, ヨーガとアーユルヴェーダの指導者となった。インド独立後, 多くの学校や病院を設立し, 貧民救済事業に献身, 自らをティルカ (= 乞食) と称した。(Anathasevashrama Trust <http://maladihalliast.com>, 最終検索日 2017 年 9 月 30 日)
- 27) Singleton, *op.cit.*, pp.101-104. (訳書 133-138 頁)
Alter, Josef S., *Yoga in Modern India: The Body and Science and Philosophy*, Princeton University Press, p.82.
- 28) Singleton, *ibid.*, pp.122-126. (訳書 160-165 頁)
- 29) De Michelis, *op.cit.*, p.188.
- 30) Singleton, *op.cit.*, p.91. (訳書, 119 頁)
- 31) 佐保田鶴治「ハタ・ヨーガ・プラディーパーカー」1・27『ヨーガ根本経典』平河出版社, 1973 年, 178-179 頁。
- 32) 同書「ハタ・ヨーガ・プラディーパーカー」3・40, 230 頁。
- 33) 佐保田鶴治「シヴァ・サンヒター」雑録 5・118『続・ヨーガ根本経典』平河出版社, 1978 年, 264 頁。
- 34) Alter, *op.cit.*, pp.27-28.
- 35) 中島岳史は, この「シャーカー」を 1999 年に体験し, RSS を研究した『ヒンドゥー・ナショナリズム』においてそれを詳しく記している。時代がかなり下るので内容は変化しているが, 「シャーカー」には整列や行進, 「太陽礼拝」をはじめヨーガや武術の訓練が含まれていたという。中島岳史『ヒンドゥー・ナショナリズム』中公新書ラクレ, 2002 年。
- 36) 沖正弘『秘境インド探検記 ヨガの楽園』光文社, 1952 年, 58-94 頁。
- 37) シュリ・ヨーゲンドラ『ヨーガ健康法』山崎正訳, 1991 年。なお, 山崎は, 本書の参考文献が「今日の医学からすれば古い」ことを, 「だからといってヨーガの伝統の価値を低くするものではなく, 今日の医学は, ますますヨーガ衛生学, ヨーガ健康法の妥当性を裏づけ, その今日的意義を高める方向にあるとさえいえる」と断っている (6 頁)。
- 38) 同書, 235 頁。
- 39) Singleton, *op.cit.*, pp.116-118. (訳書, 151-155 頁)
- 40) スワミ・クヴァラヤーナンダ, S. L. ヴィネーカル『ヨーガ・セラピー』増補版, 山田久仁子訳, 春秋社, 2008 年, 215-221 頁, Alter, *op.cit.*, pp.81-86.
- 41) B.K.S.アイアンガー『ヨガ呼吸・瞑想百科』新装版, 沖正弘監訳, 白揚社, 2004 年。成瀬貴良『ヨーガ事典』BAB ジャパン, 2010 年。
- 42) Alter, *op.cit.*, pp.102-103.
- 43) ヨーゲンドラは, クヴァラヤーナンダの実験に対しては, 「クヴァラヤーナンダその他の自称ヨギたちが, 近ごろ, 似而非の科学的実験を行って, 種々のアーサナを実施するさいの血圧変化を, もっともらしい表に仕立て上げたりしているが, そのような試みは, 単に無価値なだけでなく, 人を誤らせるものでもある」などと非難している (シュリ・ヨーゲンドラ, 前掲書, 235 頁)。
- 44) 成瀬貴良『いまに生きるインドの叡知』善本社, 1999 年, 344-372 頁。山下, 前掲書, 181 頁。
- 45) Madsen, *op.cit.*, p.126. p.133.
- 46) シヴァーナンダ・ヨーガ・センター編『ヨーガ——本質と実践』ルーシー・リデル著, 竹田悦子訳, ガイアブックス, 2003 年, 21 頁。シヴァナンダ・ヨーガ・センター『シヴァナンダヨーガ入門』木村慧心監修, 太田直子訳, 産調出版, 2007 年, 10-11 頁。
- 47) Singleton, *op.cit.*, pp.175-206. (訳書, 227-273 頁)